ブロードウェイの華麗なる「対極」
万延元年の遣米使節団-Ⅱ

☆ほしひかる

筆者は 2010 年の 4 月にサンフランシスコを訪れた。その年は遣米 150 周年にあたっていたため、その遣米使節の警護船の名前をとって、チーム名を「Tokyo Soba Meister Kanrinmaru」とし、①サンフランシスコの総領事公邸、②日系人老人ホーム、③さくら祭りレセプション会場の三か所で、蕎麦を打ち、振舞った。

ところで、この度ニューヨークを訪れる機会を得た。そこで遣米使節団の正使が乗船したポーハタン号が、サンフランシスコで咸臨丸と別れてワシントン・ニューヨークへ行っていたことを思い出し、「万延元年の遣米使節団-Ⅱ」書いてみようと思い立った。

このポーハタン号にはたまたま小生の故郷の大先輩たちが乗船していたので、彼らの目から観たアメリカ見聞記を書いてみた。しかしながら、彼らの帰国後の動きが今ひとつ明確でないためと、小生の筆力不足から、小説としては中途半端な作品になってしまった。それでも、個人的にはニューヨークの理解に十分役に立ったと思っている。

尚、滞在中にお世話になったニューヨー在住の山岸正明さんと相棒の松本行雄さんと交わした会話が、この文のヒントになったことはいうまでもない。あらためて心より感謝申し上げます。「Thank You」

☆サンフランシスコ港

湾内にアルカトラス島が浮かんでいた。医師の**川崎道眠**(30 歳:1831～81)と彼の従者である**島内栄之助**(28 歳)が甲板で風を受けながら、去り行くサンフランシスコの街を眺めていた。

1860 年 4 月 7 日の夕方、**ポーハタン号**(USS Pawhatan)は**咸臨丸**と別れて**サンフランシスコ港**を出帆した。

新見豊前守正興(38歳)を正使とする日本使節団一行が日米通商条約の批准書を交換するために、ワシントンへ向かうのである。

【ポーハタン号】

ドーン！
アルカトラス島の砲台から祝砲が発せられた。
ドーン！
ポーハタン号も答礼砲を撃った。

道眠が立っている甲板へ**本島喜八郎**(30 歳)と**小出千之助**(29 歳:～1868)が、少し遅れて**福谷啓吉**(42 歳:1819～89)と**綾部新五郎**(29 歳)が寄ってきた。彼らはいずれも佐賀藩士であった。自然ともう一つの使節艦咸臨丸に乗っている同じ佐賀藩士**秀島藤之助**の話題になった。

「藤之助もワシントンまで行きたかったろう」

「**木村**(**摂津守喜毅**)さんも行きたかったらしか。バッテン、**勝**(**麟太郎**)さんが止めたという話バイ」

この度の使節団は正使艦ポーハタン号と護衛艦咸臨丸からなっていたが、アメリカ大陸へ無事着いたことで、咸臨丸の護衛役は終わっていた。そのためポーハタン号だけがワシントンへ向かうのである。

よって咸臨丸の乗組員である秀島藤之助とも別れたが、サンフランシスコでの藤之助は佐賀藩士にとって自慢であった。

というのは、咸臨丸がポーハタン号より一足先に入港したときのことだった。両国が互いに祝砲を撃ち合おうというとき、艦長の勝麟太郎が船員の砲術技術を危ぶんで、**佐々倉桐太郎**に「止した方がいい。撃ち損じて恥をさらすだけだ」と言ったという。それを聞いていた藤之助は、大砲に近寄って行って、無言で火薬を詰めて砂時計を見つめ、順次見事に打ち続けたという。

後で聞いた佐賀藩士たちは「藤之助、快なり」と手を叩いたものだったが、その「快」とは頑固で融通がきかないようで、責任感が強い佐賀の「根性もん」ぶりを明示したような話であったからであった。

福谷啓吉が「藤之助は一所懸命、大砲のことを調べておった」と口をはさんだ。福谷は今でこそ佐賀藩士であったが、元は三河国吉田藩の武士であったから、やや皆の空気が読めないところもあり、直接的なことを口にした。そんな福谷の言葉を道眠が引き取り、「お前たちも、お土産を持って帰らんと、殿様に殺されるゾ」と言って、笑った。むろん実際に殺されるわけではないが、それは藩主斉正の情報収集の執拗さを指した言葉であった。

10 代藩主(1830～61)**鍋島肥前守斉正**(1815～71) は、ポーハタン号に乗り込む藩士たちを前にして、視察、調査項目を事細かに指示した。島内らには大砲や銃、火薬など軍事や技術面の視察を命令し、加えて語学力に優れていた小出千之助には国民の生活や産業、貿易、教育など幅広い分野の調査を命じた。しかも「十分に調べていなければ処分を言い渡す」との厳命であった。

藩主斉正の治世は明確だった。(一)藩財政の健全化と(二)長崎警備の完遂、(三)それを優れた人材によって推進する。その人材は藩校「弘道館」で養成する、というものであった。

だから、佐賀藩では「勉学は合戦と思え」という叱咤激励の言葉が横行していたが、それは何事にも真剣である藩主の性格からくるものだった。たとえていえば、鉄砲を作ったことのない斉正が今この場で作れるぐらいの詳細で、具体的で、正確な情報を彼は欲するのである。たいていの者は藩主の執拗な尋問攻めの後は自室で大の字になって寝転びたくなるほどに神経と脳を消耗する。それを称して「殺される」というのであるが、実際に重圧に耐えかねて、狂ってしまう者も出ていた。それでも藩士たちは仕え甲斐があった。というのは、藩主の知識欲は相手が家老であろうと、足軽であろうと、お構いなしであった。今風にいえば、扱いが平等であったのである。斉正からみれば知識を持っている者が役に立つ家臣、持っていない者は役に立たない家臣であった。そういうクニだからこそ、当時佐賀藩はアジア一の工業国になりえた。

【鍋島斉正、品川台場巡視之図鍋島報效会絵葉書より】

1850 年に佐賀藩は日本で最初の反射炉建設に成功させた。それゆえに 53 年には幕府から品川砲台の備砲の注文があった。続く 56 年には伊豆韮山の砲術家江川のもとに技術交流のため、佐賀藩は**田代孫三郎**と**杉谷雍助**を派遣するほどであった。

後日談であるが、この秀島藤之助はアームストロング砲の製造に成功し、維新戦争時に上野の彰義隊をわずかな弾数で壊滅させたのである。

これも祝砲とはいえ、アメリカ・サンフランシスコ湾での成功が自信となって活力をつけたのかもしれない。

しかしながら、「勉学は合戦と思え」という激しすぎる激励から悲劇も起きた。秀島は、当時佐賀藩の精錬方に勤めていた「からくり儀右衛門」こと、田中儀右衛門父子の、子の方を口論の末に殺害してしまった。

のち、田中はこの悲惨を乗り越え、現在の東芝の元となる芝浦製作所を立ち上げるのであった。

道眠が船室に戻ると、賄方の**佐藤恒蔵**(豊後杵築藩士・37 歳)がサンフランシスコの中国人の店で豆腐や油揚を買ってきて作ったといって豆腐汁を運んできた。豆腐汁を口にするのは日本を出て初めてのことである。またもや皆が船室に集まってきた。その中には、肥後熊本藩士の**木村鉄太郎**(31 歳)と**荒木数右衛門**(25 歳)の顔もあった。

このポーハタン号には、77 名の使節団が乗船していた。団員は、幕府方と、それ以外にも「従者」という形で諸藩から随従した者。諸藩から来たサムライの顔ぶれを見ると、肥後熊本藩 2 名、他に豊後杵築藩、長州萩藩、土佐藩、上州館林藩、加賀藩、仙台藩、奥州盛岡藩が各 1 名ずつだった。そんな中で、肥前佐賀藩だけは藩士 5 名と医師 1 名という数であったから、自然と佐賀藩が幕府方とは別の柱になったが、そこに九州人同士で言葉が通じやすいという点もあって、九州の藩士たちが入れ替わり立ち代り道眠の船室に顔を出していた。しかも江戸を発ったときはまだ寒かったから、彼の室には火鉢が据えてあり、冬の間は炭火が灰に囲まれて熾っていた。道眠はその火や灰やらを火箸でいじりながら、終日誰かを相手にお茶を呑んでいた。

そんな様を見て、監察の**小栗豊後守忠順**(33 歳)は「アメリカは佐賀藩に乗っ取られるかもしれんな」と笑った。

川﨑道眠 ― 本姓は松隈氏、先祖は松浦郡草野庄滝川村の豪族だったらしい。それが戦国時代の前後ごろ佐賀郡へ移住して来た、と松隈の父は言っていた。実父の**松隈甫庵**は佐賀三支藩(小城藩、蓮池藩、鹿島藩)の一つ**蓮池鍋島の九代藩主甲斐守直統**に仕える医師であり、佐賀城下の片田江に住んでいた。ちなみに使節団の中には蓮池藩から英語が得意な**綾部新五郎**が加わっていた。

道眠の兄**松隈元南**は佐賀藩候侍医、後に藩校「弘道館」の医学寮「好生館」(現在の佐賀県立病院)の初代院長に就いている。

四男坊である道眠は佐賀本藩親類同格の**須古鍋島安房守茂真**(1813～66)に仕える医師**川**

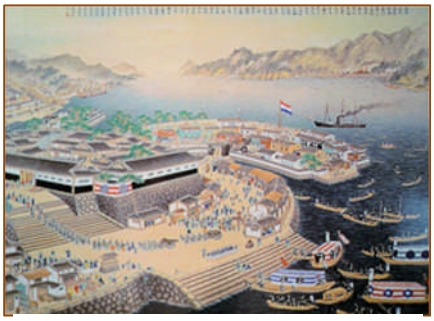
﨑道明の養子となった。

須古鍋島家は須古邑の領主であるが、祖は戦国大名の**龍造寺隆信**(1529～84)の異母弟**信周**であった。それが 3 代目**茂周**のときに鍋島姓を与えられて「須古鍋島」と呼ばれるようになった。

佐賀藩では、「御三家」「親類」「親類同格」「家老」「着座」という身分秩序が確立していたが、龍造寺氏系の武雄鍋島家･多久家･諫早家･須古鍋島は、いずれも「親類同格」扱いであった。

安房守茂真は、藩主肥前守斉正の庶兄に当たり、須古鍋島家を継いで家老として常に藩主を支えていた。

その領主茂真や藩主斉正の奨励により、川﨑道眠は「弘道館」から、長崎海軍伝習所へ赴き蘭医学を 3 年間勉強。さらに大槻家の塾芝蘭堂で**磐渓**(1801～78)に学んで佐賀藩医となった。



【長崎海軍伝習所
佐賀城本丸歴史館絵葉書より】

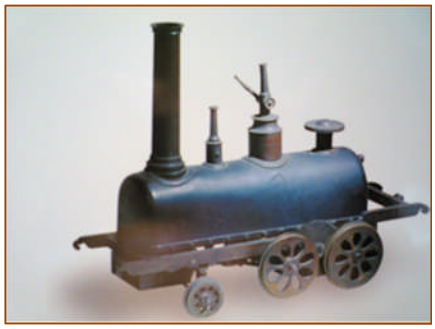
【佐賀藩邸(長崎大黒町)砲台図
鍋島報效会絵葉書より】

要するに、優秀な人物であった。だが、丸坊主の道眠はいつもデーンと座っている。その姿は、日本人の目から見れば侠客の親分のように貫禄があったが、アメリカの水夫たちの目には珍しく、不思議そうな顔をして「一日中、座って何をしているのだ」と尋ねてきた。道眠が「何もしていない」と応えると、その水夫は首を竦めて部屋から出て行った。

☆パナマ港・カリブ海・ニューヨーク湾・モンロー砦

4 月 25 日、ポーハタン号は**パナマ港**に着いた。一行はここで汽車に乗り移った。いよいよ日本と縁の深いポーハタン号とお別れである。**ピアソン艦長**ら幹部たちが甲板に列し、見送ってくれた。彼らは日本を発って以来、長期間ともにした船友であった。キチンと整列した彼らを見ると胸にジンとくるものがあった。副使の**村垣淡路守範正**(47 歳)がその思いをこめて惜別の歌を作った。

「姿見れば ことなる人と おもへとも その真心は かはらさりけり」



【蒸気車雛形(日本最古)
鍋島報效会絵葉書より】

無論、一行は汽車に乗るのは初めてであった。雷鳴のような音を轟かせながら汽車は走る。とくに佐賀藩の連中は興奮していた。藩では精錬方が汽車と蒸気船の雛型を造っていたが、こうして現実に線路の上を突っ走ることができようとは夢にも思わなかったからで

あった。
栄之助はたまたま席が熊本藩士の木村鉄太郎と杵築藩士の佐藤恒蔵と一緒になった。鉄太郎は栄之助に、こう言った。
「九州で汽車を走らせてみたかの、何処よりも早う。」
確かに、汽車という乗り物は肥前、肥後など一国だけのものではなく、九州全域を視野に入れておかなければならないようである。栄之助は、夢のようだが、そうしたいと思った。
そのとき、誰かが言った。
「参勤交代は行列ではのうて、汽車で行くんか･･･。」
発想の飛躍ぶりに一同、固唾を呑んでしまったが、あり得ることでもあった。
途中、汽車は**サン･パブロ**で一時停車した。そこは気温摂氏 35 度、かなりの湿気もあった。アメリカ側がカリフォルニアオレンジの絞汁に砂糖と氷が入ったものを用意してくれた。美味しかった。冷たい水は日本人も飲む。しかし、冷たくて、甘い飲料水は初めてであった。小出千之助は記憶に残る美味しさであると思った。続く食事は、牛･豚･鶏肉フライ･パン･ワイン･オレンジ･干葡萄･椰子であった。賄方の恒蔵が料理についていつも記録していたので、見習って千之助も筆記するようになったが、いつも「肉、肉、肉」と書かなければならないところが嫌だった。
そこへ勘定方の**森田岡太郎**(48 歳)と通弁方の**名村五八郎**(34 歳)が通りかかり、森田がその筆記を覗きこみながら「朝食は breakfast、昼食は lunch･･･」、と言ったので、千之助が「夕食は dinner」と応じた。おそらく森田は「夕食はディナーという。知っているか」とでも言うつもりだったのだろうが、機先を制されてしまい、詰まらなさそうな顔をしたので、名村がニヤニヤ笑った。
筆記といえば、日本人全員が聞いたこと見たことを何でも小まめに書き付けていた。
そんな姿にアメリカ人たちは感心し、ある幹部たちは「日本人の熱心さは素晴らしい。そのうちに彼らは旧弊を改めていくであろうから、どんなに送迎に骨が折れても苦労の甲斐がある」。「その点、中国人は頼まれてもごめんだ」などと話していた。

汽車は**アスピンウォール**に着いた。ここも暑かった。
ここではアメリカ海軍の軍艦ロアノーク号(**マクルーニ提督**、**ガードナー艦長**、以下 540 名)が使節団を待っていた。ただ、ロアノーク号はこの港にわれわれを 10 カ月以上待っていたらしい。その間に病人、死者も出たと聞かされた道眠は、その厚情に感動し、横に立っていた村垣と小栗に「まさに、姿見れば ことなる人と おもへとも その真心は かはらさりけり、でござるな」と言った。
村垣は「うむ」と頷いたが、小栗が「提督のマクルーニという男は 1854 年、あのペリー艦隊が再び神奈川沖に来航したとき、ポーハタン号の艦長だったのじゃ」と言った。
それを聞いて道眠は「そういうことか」と合点した。つまり日本通に日本人使節団のことを任せているのは、それだけこの国がわが日本を大事に思っているということだと分かったのである。
それを言うと、小栗は「そうとばかりはいえまい。アメリカ人は商売人ばかりの国じゃ。

政治家には軍人もいるが、商売で成功した者も多くいる。アメリカ人は、客を『客』と言わずに『友人』と呼ぶ。そうして親切にする。われわれはアメリカを好きにならざるを得ない」と言う。
　道眠は、自分とほぼ同年齢の小栗の観察力に舌を巻いた。

　朝飯は、だいたい塩鮭、ベーコン、玉子焼、ご飯、パン、バター、コーヒーだった。ここでもバター臭いご飯だった。みんな手を出そうとしない。
　「まだパンの方がいいな。喉に詰まったときは水で流し込めばいい」と言いながらも、パンを千切らずにかぶりついたためむせてしまい、「水、水ッ」と騒ぐ始末。見かねた賄方がホテルの厨房へ行って、「バター抜きの飯を」と頼むつもりが、たまにプライドの高いシェフがいたりすると、「余計なことをするな」と、厨房に入るのを禁じてしまうこともあった。

　数日後、右にキューバ島、左にフロリダを望む**カリブ海**の上で、郵便船から新聞などを受け取った。
　その新聞を読んだアメリカ人水夫が、道眠に「日本のことが書いてある」と教えてくれた。その内容は**井伊大老**(1815～60)暗殺の記事だということであったが、とても信じられないことである。道眠は笑い捨てた。
　しかし、たとえ嘘だとしても、「遥かなる海の果てのアメリカで、日本の事件を知るこのできる新聞」というモノに道眠は驚き、関心をもった。
　それから、ロアノーク号は**ニューヨーク湾のサンディ・フックの沖**に投錨した。使節団はここニューヨークに上陸し、そこからワシントンに赴くことになっていた。だから、ニューヨークは彼らにとって目的地とほぼ同じくらい意味のある市であった。だから使節団一行は沖の彼方に市街を望みながら上陸に胸をふくらませていた。ところが、どういう理由かは分からないが、急遽ニューヨークからではなくノフォークから上陸せよということに変更になった。
　5 月 13 日、一行はワシントンの川筋の入口**ハンプトン・ローズ**に向かい、そこから川蒸気船フィラデルフィア号に乗り移った。そのときロアノーク号の船員が「蛍の光」を歌って、見送ってくれた。
　栄之助が「いい歌ですね」としみじみとして言った。どちらかといえば技術畑の栄之助には似合わない言葉だったので、道眠はちょっと驚いた。道眠は栄之助が気に入っていた。理由はなかった。ただ、優れていながら決してそれをひけらかさない佐賀もん独特の雰囲気のせいかもしれなかった。
　このとき道眠は、十日ほど前、**ポルトベルロ**で水を積み込んでからニューヨークへ向かうために沖へ出たとき、病死した水夫 2 名の葬儀が行われたときのことを思い出した。彼らは、遺体を帆木綿で包み、30kg ほどの鉄玉を足に結び、海中に投じた。艦長、士官、水夫が並び、牧師が聖書を朗読して引導を渡す。音楽が奏せられ、小銃が放たれ、皆涙した。
　アメリカ人は人との出会い、そして別れを大事にする。むろん日本人だって同じだが、彼らのそれは人間一個人に対する尊厳の心があるような気がした。

道眠は医師として武士の死も百姓の死も変わりはせんと感じていたが、アメリカ人にはそれがあると思った。が、それをいちいち説明はしなかった。ただ「ああ、いい歌だ」とだけ返答した。

船内の食堂での昼食は、牛･豚･鶏･鴨の肉類に魚類、それにブドウ酒･パン･ご飯･果物である。肉類は相変わらず臭く鼻についた。

新五郎が道眠と千之助に「面白いことが書いてある」と言って、現地の新聞を広げて見せた。そこには「日本人の好物は味噌汁と魚」、「彼らは食事を摂るときには上官から従僕にいたるまで必ず挨拶してから食べる」とある。

千之助は新五郎に言った。「新鮮な魚が好きな日本人、古くなった生肉が好きなアメリカ人。食事のときは五観をなす日本人、すぐ食べ始めるアメリカ人、か。」

そういわれてみれば、日本人が当然の習慣となっている「頂きます。ご馳走さま」は、いったいいつごろから言い始めたのだろうかなどと考えてみるとおかしかった、だから道眠にそのことを言ってみた。

すると道眠は、「それは･･････、〝五観〟を提案した道元以降だろう。それにしてもだ。この新聞というやつはそんなことまで指摘してくれるか」と専ら新聞の方が気になってしかたがないという風であった。

一行はその後、**モンロー砦**を見学した。砦には大砲 580 門、守備兵 2000 名がいるという。

案内のアメリカ人が「この砦には、有名な作家**エドガー･アラン･ポー**(1809～49)も、1828、29 年ごろここで勤めていた」と得意気に説明してくれたが、日本人たちは、エドガー･アラン･ポーなる作家を知らなかったため、聞いても何の反応も示さなかった。

それよりも、木村鉄太郎や荒木数右衛門などは、「アメリカはいったい何処の国と戦さをしとるとか」と話していたが、誰も答えることができなかった。

☆ワシントン

5 月 15 日、ポトマック川を遡ると、華の都**ワシントン市**街が見えてきた。

さて、太平洋を横断してやって来た長旅の目的を達しなければならない。一同は緊張してきた。

船が支流のアナコスティア川のワシントン海軍造船所の上陸場に到着すると、またしても祝砲、17 発が撃たれた。

日本人三使の顔は一様に引き締まった。いよいよ批准書交換である。

新見、村垣、小栗の三使は、黒の紋服に野袴に着替えた。

新見が突然、村垣に言った。「**聖徳太子**が派遣した遣隋使たちも、わしら以上に緊張したであろうの。」

あの伝説の聖徳太子による遣隋使以来の歴史的大役であるのかもしれない、と言いたかったのだろう。

村垣は何も言わずに、笑った。

それにしても、見物人はざっと見ても四、五千人はいる。皆、東洋からの珍客 80 名を見

ようとしてのことであるが、振り返ってもこの旅では何処へ行っても宇宙人が来たかのようにお祭騒ぎであった。

ここワシントンでも、軍楽隊の演奏と共に、先頭に騎兵、美麗に飾り立てた四頭立の馬車、乗合馬車、各馬車の左右は銃卒、最後尾には二大隊ほどの歩兵が従った。まるで山王神社か、神田明神の山車行列である。

宿は、ペンシルベニア街にあるウィラーズ･ホテル。サンフランシスコ･ジャクソン街のインターナショナル･ホテルにも驚いたが、ワシントンのウィラーズ･ホテルはより豪壮だった。

ホテルというのは旅人の宿であるはずだが、アメリカのホテルは日本の宿とちがって城のような堅固な建物であった。ここで会議や食事会や音楽会が開かれる。アメリカでは、こんな豪壮な建物を大金持の個人が建てるのだという。建てた者は市の名士となる。金の力で特権階級を買うようなものだ。出入する客までも殿様お姫様のような権威･権力を持ち合わせている。

それ故に、みんな商売に熱心になり、金持になりたがる。それがため、彼らは日本までやって来た。金はアメリカ人の活力であり、それ以上の哲学のようなものなのかもしれない。

千之助は食堂に入ってみた。広さは 36 メートル×13 メートル、天井から新しいシャンデリア、窓には美しいカーテンがかかっていた。長いテーブル(6 メートル×.09 メートル)の上には、銀の食器、金めっきした磁器、ボヘミアガラスに、皿 3 枚、銀のフォーク、スプーン、ナイフ、コップ、ナプキン･･･。

一行の目もだいぶ慣れてきたが、日本では決して見ることのできない華麗なる食卓である。

椅子に座ると、氷水、ワイン、シャンペン、鶏のスープ、ゆで玉子、豚の丸煮、牛の股、鶏肉、魚(頭と尾のない鯛･鱒･鮭)、牛乳(全ての煮炊きに使用)、パン、コーヒー、茶、西瓜、オレンジ、砂糖漬、カステラ、アイスクリームが次々と運ばれてくる。

鶏のスープは味噌汁の代わりと思えば飲めないこともなかった。困惑するのはご飯である。「日本人のために」と用意してくれるのであるが、これがお粥状だったり、芯があった硬かったりする。「せめて飯だけは日本式で･･･」との思いで、恒蔵らが厨房に行って焚き方を教えたら、まあまあになった。

もっと戸惑うのは、食器を手に持つのはマナー違反だという。しかも碗は少なく、ほとんどが皿(デッィシュ)ばかりである。主食の馳走を「メインディシュ」と称するくらいだ。それが一番手前に置いてあって、手に持ってはいけないから、着物の袂が触れて汚れてしまう。

日本の膳は碗が手前に、皿は向こうに置く。だから袖が皿のモノに触れることはないし、ましてや椀は手にするから袂が汚れるようなことはめったにない。それを思うと、洋式の食作法に苛立つこと苛立つこと。

食器の形と食事作法と衣服が一つになって、その国の文化をつくっている、と千之助は袂の汚れを拭きながら、痛感したものだった。

5 月 18 日、いよいよホワイト･ハウスへ入城の日である。

イオニア式の豪壮な白亜の建物。「これがアメリカの大統領がいる城か」とまるで江戸城に初めて入るときのように緊張する。鉄の門が開いた。車のまま敷地内に入る。庭の泉水や樹木は日本の庭園とはちがうが、それなりに美しい。入口の石段を登って行くと、控の間に案内された。広さは七間×四間ほど、藍色の絨毯、窓にも同色のカーテン、そして大きな鏡がある。アメリカ人は鏡が好きだ。どのホテルに行っても部屋には大きな鏡がある。

謁見の間は二百坪ていど。部屋には、蒔絵の硯箱、料紙などが飾られていた。聞けば、それはかつて幕府がペリー提督に贈ったものだという。こうしたこともアメリカ側の配慮だろう。

正使新見豊前守正興は狩衣に鞘巻の太刀、副使村垣淡路守範正は狩衣に毛抜太刀、監察小栗豊後守忠順は狩衣に鞘巻の太刀。各烏帽子は萌黄の組掛、糸鞋、森田岡太郎は布衣、成瀬善四郎正典は仮布衣。

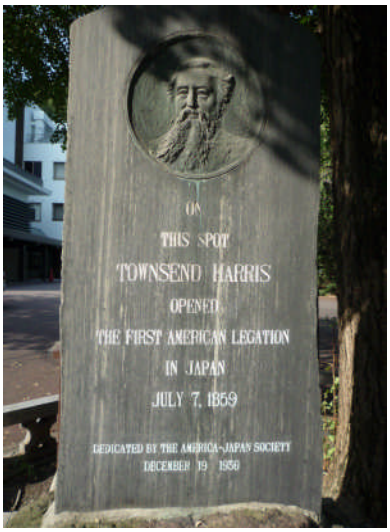
そこへアメリカの第 15 代大統領**ジェイムズ・ブキャナン**(1794～1868、大統領位 1857～62)が笑みを浮かべながら現れた。彼の姿は黒羅紗の筒袖に股引。身丈は高く、色白く、容貌温和。68 歳、独身だという。

正使新見豊前守正興が言う。「日米両国間で修好通商条約が結ばれ、この度自分が条約を批准するため貴国の首都ワシントンに遣わされました。これより両国の友好関係がますます親密になることを祈ります。また往還に貴国の軍艦をご用意下さったことを感謝します。」

ブキャナン大統領が応じた。「修好通商条約の批准は日米両国民に裨益するところ大であり、きっと幸福をもたらすでしょう。」

日本側は、真太刀一振、馬具一揃、狩野派・住吉派の掛軸十幅、翠簾屏風十双、錦の幔幕、蒔絵の書棚、蒔絵の硯箱、蒔絵の料紙箱を贈呈した。

再び大統領が言った。「日本は鎖国以来はじめて和親条約を締結し、わが国に大君の使節を送られたことを私ばかりか国民一同が待ち望んでいたことです。」



【麻布・**駐日公使館跡**】

「終わった！」

ホテルに戻った 新見豊前守と村垣淡路守は役目が肩の荷がおりたような気持になった。

安政五年六月十九日(1858 年 7 月 29 日)に、日米修好通商条約がポーハタン号の船上で第 14 代将軍**徳川家茂**(1846～66、将軍位 1858～66)と**タウンゼント・ハリス**(1804～78)の間で結ばれた。

その条約の批准書を交換するために、咸臨丸は安政七年一月十八日(1860 年 2 月 9 日)に、われわれポーハタン号は一月二十二日(2 月 13 日) に横浜を出航した。そして 5 月 18 日の今日、ホワイトハウスで条約の批准書を交換したのであった。

緊張感が解けると、どちらからというわけではないが、「国書を奉呈するから礼儀は尽くしたが国王でもない代表に狩衣でよかったのかの」という小さな疑問が呟やかれた。

「これでいいのだ。礼は尽くした方がよいだろう。」

「そうじゃの。それにしてもアメリカはおかしな国だ。大統領は 4 年目ごとに入札で決める総督のようなものだという。」

「日本でも村の長を入札で決める所もないではないぞ。」

「うん。じゃが、こんな大きな国が、それでいいのかと思ったりもするな。」

「天皇や将軍と違うてご威光というものが大統領にはない。代わりに、大きな権限が約束されているようじゃ。」

とりとめもない会話の後に、二人は暫く口を閉じてしまった。

口を閉じて、思わず黙ってしまったのは、一抹の不安が胸を過ぎったからであった。それはカリブ海で耳にした「井伊大老暗殺事件」であった。

まさかとは思うが「あり得る事」でもあった。

締結を許した井伊直弼は、対立派を弾圧したのである。もし井伊大老が暗殺されているとしたら、幕府はどうなる？ 日本はどうなる？

語らずとも二人は同じことを思っていた。

そんなころ、道眠と、**宮崎立元**、**村山伯元**の三人の医師は、アメリカのエヴァンズ、ホルストン、リンカーンの三医師と二時間にわたって会談をしていた。

驚いたことに、その会談の内容が翌日の新聞に掲載されているのである。

「日本は、解剖実習は少ない。産科学は女医が多い。日本の医学は発展途上であるが、進歩を遂げるのは疑いがない。」

確かに、そうだった。十年前に楢林宗健が種痘を実施した佐賀藩、そして遅れて江戸ではやはり佐賀出身の伊藤玄朴がそれを実施したが、解剖実習まではまだまだであった。

「それにしても」と道眠は思う。何処に行っても『デイリー ナショナル インテリジェンサー』『ザ ニューヨーク タイムズ』『ジ イブニング スター』『ザ ニューヨーク ヘラルド』らの新聞記者がいるし、彼らの態度には驚くばかりである。記者は何時でも、何処へでも無遠慮に出現して、相手がどんな高官であろうと対等に口をきき、おまけにカメラマンはバシッ･バシッと写真を撮る。写真屋という職業もあるらしい。新聞の形態は瓦版と似てなくもないが、瓦版がせいぜい聞き耳を立てて、聞いたことだけを書いているのに対して、新聞は対等な立場での質問によって、中身が格段に濃い記事となっている。道眠は、最初のサンフランシスコ辺りでは、「誰が彼らにそのような権限を与えているのだろうか？」とも思っていたが、どうもそうではなくて、新聞社、新聞記者という職業そのものにそのような〝無遠慮さ〟が、社会から認められているような気がしてきた。それが欧米という社会なんだと考えるようになってきた。

【淳一郎君（後の 11 代藩主直大）**種痘之図】**佐賀県立病院好生館絵葉書より

5 月 26 日の午後 6 時からホワイト･ハウスで大統領晩餐会が開かれた。シャンペーン、シェリー酒、ビール、鼈のスープ、大平目、鳩、鶏、ゆでハム、大海老のサラダ･･･。

使節団はウィラーズ･ホテルに着いてから毎日西洋料理に親しんでいたが、一日一回は米

の飯も食べていた。三使と上役は、肉･魚･飯に加えて酒･菓が出た。下役･従者もほぼ同じではあったが、品数が少なく酒もなかった。
　食卓にはいつも塩、醤油か、辛子胡椒などが置いてあり、塩気が足りない西洋料理にこれらを降りかけて食べていた
　晩餐会にはアメリカの若い女も大勢いた。彼女たちは男の心を誘うような色っぽい美しさがあるので、日本人の若者たちのなかには見惚れる者もいた。「しかし、あの赤い髪はいけない。まるで犬の毛だ」と三使らが浮々している日本の若者をつかまえてからかった。

　夜、ホテルの大広間で幻灯を見せてくれた。諸国の名所の映像で、伴奏付だった。ブキャナン大統領もお忍びやって来て、観客に交じって観ていたらしい。道眠は、この幻灯にも強い興味をもった。

　幻灯会後のことだった。三使の部屋に集まるように指示があった。
　部屋に入ると、幾枚かの大皿に蕎麦切が盛られている。そしてつゆの入ったガラスのコップに、箸やフォークが添えてあった。
　「お～ッ」と、皆が感嘆の声を発した。
　すぐに新見が無事大役を果たしたことの報告と謝礼を述べて、祝杯がわりに賄方が打った蕎麦切を少ないが食ってくれと言った。
　使節団は大量の荷物の中に蕎麦粉、醤油、鰹節、を入れておいたのであるが、それを近江出身の賄方**山本喜三郎**(49 歳)らが打ち、つゆも作ったというのである。
　新見がいうように本当に二、三口啜るだけの少ない量であった。しかし旨かった。
　千之助と栄之助と綾部新五郎の三名が道眠のところへやって来て、言った。「道眠先生。やっぱり日本人は麺ですね。パンじゃなかですよ。」
　道民は栄之助の顔も見た。すると涙ぐんでさえいる。長い船旅の末に異国のいると、その涙は笑えなかった。道眠は栄之助の肩を軽く叩き、「ワシもそう思う」と千之助と新五郎の顔を見ながら言った。
　綾部新五郎、この男も優秀な男として佐賀藩では知られていた。藩主の命によって江戸遊学中のところを、この使節団にも加わるよう指示されての参船であった。もともと綾部氏というのは古代からの肥前の豪族である。『肥前風土記』を読むと「三根郡漢部郷」というのが出てくる。「もしかしたら、邪馬台国以来の人種かもしれない」などと思いながら、顔を見ると遥かなる太古を偲ばせるような深い尊さが漂っていないでもなかった。

☆ボルチモア・フィラデルフィア
　6 月 9 日、一行はワシントンを汽車で発って、**ボルチモア**に着いた。
　ここで「日本人で、この地を初めて訪れたのは皆様方が初めてではない」と聞かされ、三使以外の者は一様に驚いた。
　「漂流民彦太郎」との名前を神奈川奉行でもある村垣から聞いて、話を聞いたことあるという者もいた。彦太郎こと**濱田彦蔵**(1837～97)は、1850 年江戸から播州への帰途遠州灘で暴風に会い太平洋を漂流し、アメリカの船に助けられ、サンフランシスコへ連れて行か

れた。仲間は中国へ送られたが、1853 年に彦太郎はボルチモアのミッション･スクールで教育を受け 1859 年に帰国し、神奈川領事ドールの通訳になったのである。
道眠が小出千之助に「どがんか。お主も、この地に留まってミッション･スクールで語学を学んで帰るか？」と軽く言ったのであるが、千之助は暫く本気で悩んでいた。

一行はカルヴァート街のギルモー･ハウスに泊った。
ここでも小説家ポーの名前がアメリカ人の口にのぼった。ボルチモアはポー終焉の地であるという。
そんなに大きくないこの町に新聞社･雑誌社が乱立しているのも、ポーがいたことと無縁ではなかろう、とジャーナリズムということに強い関心を持ち始めた道眠は理解した。

夜はボルチモアの空に何発もの花火が上がった。最後の仕掛花火には、
「Welcome Japanese」
「Baltimore1860」
の字が華やかに描かれた。
見物していた**福島恵三郎**（19 歳）、**堀内周吾**（17 歳）、**三村広次**郎（17 歳）、**立石斧次郎**（17 歳）ら若者が「アメリカの花火もすごい」と興奮したようにして称えていた。

6 月 10 日メリーランド州の北東**ハーブル･デ･グラス**という町に着いた。
川が流れていた。「サスケハナ川」というらしい。汽車に乗ったまま列車フェリーで運ばれ、対岸の「ペリー」という所に着いた。この大掛かりの仕掛に日本人たちは驚いたが、それとは別に、新見と村垣は「ペリーが乗って来た黒船の『サスケハナ号』はここに由来するのか」とまるで新大陸を発見でもしたように喜んでいた。

フィラデルフィア･チェストナット街にあるコンチネンタル･ホテルは 6 階建の堂々とし建物であった。
ここでちょっとした事件が生じた。
『ザ･フィラデルフィア･インクワイアラー』紙が、また日本の「大君の暗殺」を報じていたのである。記事はこうだった。「3 月 15 日、大君が 14 名の暗殺者によって殺された。6 名の従者も殺された。」
今度は一行全員が知るところとなった。皆は肝をつぶし憂慮したが、新見の「騒ぐな」の一言で、一同平静を装った。
カリブの船上でも「井伊大老、暗殺」の記事が掲載されていた新聞があった。道眠が部屋に戻って日記を捲ったところ、日付は「三月十五日（太陽暦 5 月 5 日）」となっていた。
「今日は四月二十三日（6 月 12 日）。記事に一ケ月以上の遅れがあるのは船便のせいであろうが、おそらく井伊大老が暗殺されたことは間違いないだろう。井伊大老なら登城の途中、刺殺団に襲われる可能性はある。しかし、大君すなわち天皇、あるいは将軍が暗殺されるなど考えられない。もし大老暗殺となれば、今後どういう影響が出るのか？ 幕府の力の失墜か！ ならば、条約締結はどうなる？ いや、これは正しかったはずだ。であるのに、

もし国内の者たちが条約反対へと押し戻すようなことをすれば、日本はあの清国のように食い物にされるだろう。たぶん幕府側の三使たちも同じ考えをもっているにちがいない。だから、この件について緘口令を敷いているのだ。」

開国論者であった師の**大槻磐渓**の影響もあるが、それよりもこうして海外の人間と会っていると、道眠は、開国も、条約締結も決してまちがっているとは思えなかったのである。

「ともあれ、渡航中はアメリカ文明をこの眼でしっかり見て、殿につぶさにご報告申し上げることじゃ。」

道眠は日記を閉じた。

フィラデルフィアでは、ガラス工場、材木仕上工場、石版印刷工場などを見学した。ガラスは日本ではあまり普及していないので、皆はガラスの作り方に一番関心をもった。

見学中、森田がこんなことを言った。

「アメリカ人の通訳に『日本製品についてどう思うか？』と訊いたら『陶磁器、漆器は素晴らしい。これといった機械もないのによく作れる。日本人の英知には感心する』と答えた。」というのである。

「これといった機械がない！」と聞いたとき、道眠はハッと思った。そうだ。機械 ― これが西洋の文明なのだ。帆船ではなく蒸気船、馬車ではなく汽車･･･。手作りの磁器･漆器ではなく工場で造られる大量のガラス製品、手摺の浮世絵ではなく工場で刷られる大量の印刷物。手作りではなく大量の工場製品、つまりは、機械や工場そのものが西洋文明なのだ。しかし、これらを一朝夜にして、日本に導入するのは難しかろう。ならば、何から始めればいいのか？

☆ニューヨーク

一行はサウス･アンボイ駅から迎船アライダ号に乗り移り、そしてマンハッタン島の南端カッスル･ガーデン(現：バッテリー公園)前に投錨した。

港には沢山の船が停泊していた。**ニューヨーク**は食品加工･化学薬品･衣料･繊維･皮革･製紙などの産業が盛んで、また自然の良港に恵まれ、世界中の船舶が交易のために出入りしているのである。

上陸した一行はプリンス街のメトロポリタン･ホテルに向かった。警護の兵士たちは8,000名以上はいるだろう。日米の国旗が飾られた条約箱も、大事に四輪馬車に乗らせれた。

道路に建つ各ビル、そしてホテルの窓には歓迎の垂幕が飾られていた。

「Japan and United States Friendly Nation」

「Universal Brotherhood」

「Liberty, Equality and Fraternity」

「1860　Peace, Progress, Prosperity」

「Gates of All Nations This Day Open」

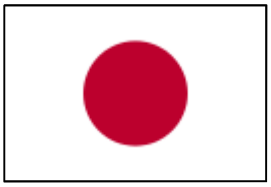
むろん、日米の国旗も掲げられている。

アメリカの国旗は、何処へ行っても目に入る。アメリカ人国旗が好きである。というよりか、国旗に誇りをもっている。と、千之助は見ていた。

アメリカの国旗は、植民地支配から独立し、アメリカ合衆国の一州に成る度に、国旗の☆が増える仕組みになっていた。ちなみに、最近ミネソタ州とオレゴン州が加わったので、星条旗の☆の数は 33 だという。

だから、アメリカという国は成長し続ける国である。と、千之助は星条旗を見ながら、痛感する。

対して、日本には国旗というものがまだなかった。ただ、寛永年間ごろから幕府は船に日の丸の旗を掲げていた。そんなところへ諸外国から国交を求められるようになり、幕府は国旗の必要性を思い始めていた。そこへ、あれは 1854 年だった。薩摩の 11 代藩主**島津斉彬**(1809～58)が「異国船に紛れざるよう日本総船印は白地に日の丸幟を掲げるよう」にと提案した。



【日章旗と星条旗】

この度の警護艦咸臨丸が日の丸を掲げたのは、こういう経緯からであった。幸い、アメリカ人は「日章旗が国旗である」と思ってくれた。

ホテルはブロードウェイを北へ行った所にあった。海岸からそう遠くはなかった。ホテルの前にも大勢のアメリカ人が押しかけていた。アメリカ人･･･、といっても一つの人種ではない。肌の色も目の色も髪の色も、金･銀･赤･茶･黒と多種である。それは多数の国から移民して来た者ばかりだからだろう。彼らはアメリカの国土を踏むと、母国語を捨てて英語(アメリカ語)で話す。それでもってアメリカ人になるのである。簡単で、不思議な仕来りだと千之助は感心する。

そのことについて、綾部新五郎はさらに鋭い見方をする。「われわれはオランダ語や英語を学ぼうとするが、彼らはそんなことしはしない。日本にやって来たアメリカ人にしても、絶対日本語を話そうとしない。アメリカ人は元はといえば多くの国から渡来した多数の人種、彼らにとってアメリカ語を話すことだけがアメリカ人たる証明、それもやっと手に入れた誇り高き権利である。母国語ですら捨てた彼らだ、ましてや他国の言葉なんか使う意味も価値もないというわけだろう。得意になって『マイ･ネーム･イズ･シンゴロウ･アヤベ』と言うわれらは甘いものだ。」

千之助も深く頷く。彼らの英語や国旗に込めた国づくりの精神がジワジワと感じとれるのである。

このホテルでも、日本人のためと気遣って米飯を出してくれたのはいいとしても、やはり臭いバターが入っていた。皆はアメリカ滞在が長くなったとはいえ、これだけは「気持がわるい」と手を出さず、相変わらず「まだパンの方がましだ」と言う者もいる。

道眠も栄之助と千之助に言った。「最初は水なしではとても食えたもんじゃなかったが、喰い慣れるうちにパンも旨いと思うようになったな。あんがい腹もちもいいし」。

「今の先生を佐賀の者が見れば、びっくりしますよ。そいにしても、飯は不味かですね。

飯を食う日本人に飯を出さんバいかんと思うとるかもしれませんが、不味か飯を食うぐらいなら、まだパンがましです」。

「そうじゃの。固くてポロポロの飯ならまだいい方で、バターで煮た飯などは気持悪くて喰えん。しかし、もし将来佐賀藩でアメリカ人を接待するようなことになったとき、似たようなことをするかもしれんぞ。奴らの大好きな肉やパンに、奴らの大嫌いな臭い味噌・醤油を付けて出すかもしれんの、ハハハ。」

千之助が面白いと思ったのは、食事の時の音楽であった。

ドッドワース楽団の「ヘイル・コロンビア」「たいまつ踊り」「悪魔ロベール」「アメリカ国家」「ウィリアム・テル序曲」など演奏、食事が音楽によって楽しくなることを始めて知った。ただ、酒を飲んでいるとき、調子のいい音楽が続くと、ますます酒の調子がすすむので、困ったことでもあった。

ところで、道眠は当時の日本の写真通の一人であった。

だから道眠は、ニューヨークでぜひとも会いたい人物がいた。それは写真家のブレイディだった。道眠はブレイディに会わせてくれと、アメリカ側に頼んだ。話はすぐに成立し、彼が案内された所は Broadway 649 番地のビルのスタジオだった。**ブレイディ**(Mattew B.Brady:1822 年～96 年)は 36 歳、歴代大統領から市民のポートレイトまで精力的に撮っていた。その作風は、肖像画家の**ウィリアム・ページ**に絵を習った後に写真家となっただけにアートだった。道眠は写真館で撮影術を習った。

こうして撮った写真を見比べてみると、「東洋から来た日本人は、小さな目にペシャンコの鼻と、真っ直ぐの髪の毛だ」とアメリカ人から言われたと、誰かが言っていたが、「それもそうだ」とつくづく感心してしまう。

写真館の者は「ミスター道眠は、頭が良く飲み込みが早いので、専門家の指導をもっと受ければアメリカを発つ前に専門家になっているだろう」と褒めるが、それもそのはず、道眠は日本を発つ前に江戸溜池の鍋島家中屋敷で藩主を撮った経験のある、日本でも一、二の腕前であったのである。

そんな彼だから、帰るときに当然写真機も手に入れ、日本に持ち帰った。

後日談になるが、道眠はその写真機で師の大槻磐渓を撮った。

【道眠が撮った藩主斉正
鍋島報效会絵葉書より**】**

それから、この時点ではまだ起きてなかったが、ブレイディは後の南北戦争を撮影し、「ジャーナリストの父」とも呼ばれるようになった。

とある日、一行はワシントン・ハイツの**ジェームズ・ゴードン・ベネット**の別荘に招待された。ベネット氏は、今から 25 年ほど前(1835 年)に『ニューヨーク・ヘラルド』紙を創刊して成功した人物だという。ベネット氏は 60 代半ばぐらいの人物で、息子は 20 歳になったばかりのような青年であった。使節団は、主人らに正式な歓迎を受けた。庭園では数百名

の招待客が音楽に合わせてダンスに興じていた。アメリカ人は庭で食事をするのが大好きである。今宵もまるでお祭りである。江戸にも浮世絵や書籍の版元というのはある。しかしこんな大きな屋敷や豪勢な宴会を行うほどの財力を持った瓦版屋はいない。道民は新聞というものの魔力は凄いものだと思った。

オーガスト・ベルモントという男がホテルに三使を訪ねてきた。ベルモントは四十代半ばぐらいの紳士だった。彼は、日本が門戸を開いたきっかけを作った、あの黒船の**マッシュー・カルブレイス・ペリー**の娘婿だという。日本からやって来た皆さんを自宅にご招待したいと言った。アメリカ人の接待に慣れてきていた一行は、ベルモントの招きに応じることにした。しかし当の黒船のマッシューは二年前(1858 年)になくなり、未亡人**ジェイン・スライデル**がいまウェスト 32 番街に住んでいるとの話が耳に入り、それならば先に未亡人にご挨拶してから行くのが筋だろうということになった。

ニューヨークの中心マンハッタンでは、西がウェスト、東がイーストという地名がよく付いていた。それに数字は南から北へ行くほど大きくなっている。だから、ウェスト 32 番街という所はそう遠くはなかった。

ペリー夫人の住む家は 4 階建の美しい建物だった。未亡人は上品な老婦人であった。子息は広東総領事として中国に赴任中らしい。

部屋には、ペリー氏が来航の折に幕府から贈られた**狩野光信**の掛軸や漆器、磁器が飾ってあった。

新見が挨拶をした。「この度日本使節がアメリカに来たのもペリーの功によるものであり、こうしてお宅を訪れたが、提督がご健在であればよかったと思います」。

すると、感極まった老婦人は、目に涙を浮かべていた。

二階の窓の外には九州の筑後川より大きな河が流れていた。千之助が窓に近づくと通訳が指をさして「あれはハドソン川だ」と言って、話をしてくれた。

1609 年にオランダの東インド会社に雇われてやって来たイギリスの探検家**ヘンリー・ハドソン**の名に由来する。オランダはマンハッタン島に上陸し、一帯を領有地にすると宣言した。その後もマンハッタン島の南端に植民地「ニュー・ネザーランド」の建設を始め、オランダ西インド会社と契約していたスペイン国内でカトリックに弾圧されていたフランス系プロテスタントたちが新世界を目指して入植させた。1626 年になると、**ピーター・ミニュイット**総督がマンハッタン島にいた先住民にナイフとわずかなガラス玉をやって、物々交換によって正式に島を買い取ったと広言する一方、ミニュイットは先住民族を襲撃、虐殺していった。加えて、大敵は北から勢力を広げているイギリスであった。

見回すと、この地がアフリカと西インド諸島とアメリカ南部をつなぐ便利な地点であったところから、黒人たちが奴隷として入ってきたし、ユダヤ人も住み出していた。

それからまもなくだった。イギリスが「先に植民地にしていたのはイギリスだ」と領有権を主張し、ニュー・アムステルダムに 4 艘の軍艦を派遣。軍事力が貧弱だったオランダは屈服し、全ニュー・ネザーランドはあっさりとイギリスの植民地となってしまった。イギリス国王**チャールズⅡ世**は新領土を気前よく弟のヨーク公に与えてやった。それから当地は「ニュー・ヨーク」と呼ばれるようになった。

話を聞いて、千之助は背中に寒気を感じた。「アメリカという国は何というところだ。まるで悪ガキどうしの喧嘩ゴッコで島をやり取りしているようだ。それと彼らの言う〝自由〟とどこが違うのだ。今の話と人の良さそうな、いや親切なアメリカ人と一体どこが違うのだ。」

一同はペリー宅を辞し、ベルモント邸へ向かった。馬車の中でも小出は黙っていた。それを見て道眠が「千之助、どうした？」と訊いてきたが、千之助は首を横に振るだけであった。

ベルモント氏はハーグ駐在アメリカ公使も務めたことがあり、現在は銀行家ということだった。彼の妻、すなわちペリーの娘**キャロライン**はなかなかの美人で、ずいぶん若く見えた。客は他に百名以上は来ていたが、今宵の主賓は日本からの使節団であり、主人役はキャロライン夫人であった。

ベルモント氏は、ワインの心配をしたり、小まめに世話をしていた。

そのためベルモント氏とはあまり会話をする機会がなかったのだが、通訳から、マッシューの兄**オリヴァー**も海軍の軍人で米英戦争の時のエリー湖の戦いで勝って「英雄」と呼ばれていることを知って、一同はこの邸に武士の匂いを感じ取って満足だった。

再び道眠が心配してきた。「千之助、大丈夫か。疲れとったら、はやくホテルに戻れ。」

「いや。心配ありません。それよりか、道眠先生。」

「おう、何じゃ。」

「これからはオランダ語じゃのうて、英語の時代ですね。」

「・・・・・・」

「佐賀に戻ったら、殿様に申し上げようと思うています。」

「ああ」

そのことは道眠のごとき医師にとっては、重要な問題であった。なぜなら言葉だけの問題ではなく、蘭方医も古いということになるのである。だから道眠の返事はおのずと重かった。

しかし、千之助は「〝悪ガキ〟思考に打ちひしがれることなく、蘭語から英語へとの時代の変化を敏感につかんだのであった。

そのため、千之助は帰国後、藩校「弘道館」の蘭学寮頭取をしていた**大隈重信**(1838～1922)に英学の必要性を熱く語った。千之助の主張を受け入れた大隈は、1867 年に長崎五島町にオランダ系アメリカ人の宣教師**グイド･フルベッキ**(1830～98)を教師に迎えて英学塾「蕃学稽古所」(翌年「致遠館」と改称。現在の佐賀県立致遠館中学･高校の前身)を設立し、後に大隈は「自分の世界観は千之助に負うところが多かった」と述懐している。

【佐賀市・**大隈重信の生家**】

反対側の席では、小栗と幕臣らが笑い興じていた。「それにしてもベルモント殿が懸命に

なって世話をしてくれるのはいいが、男というものはどの国の者もこうしたことの手際は悪いもんだな。それに毛だらけの熊のような手で料理を勧められてもなァ」と誰かが言うと、「それはそうだ。女性の白い手で出してくれた方が断然旨い。昼夜が逆の国は、男と女も逆だな」と。

ともあれ、今までアメリカ各地で「日本人のひとつのお辞儀、ひとの微笑みは言葉以上のものである」などと褒められていたせいで、日本人たちは一見上手に振舞っていたが、実はキャロラインに対しては、まるで主君のご正室か、姫様に拝謁しているように、正式の挨拶以外何をしゃべっていいか戸惑っていたのであった。

後世の余談だが、オリヴァー・ペリーの子孫オリーブ・ペリー・ワイス氏はいまニューヨークから 200km 郊外のザ・オールド・フィールドでワイナリーを経営している。

最後の夜、千之助はシャワーを浴びた。だいぶシャワーの使い方にも慣れてきた。しかし、日本人の湯の入り方、アメリカ人のシャワーの使い方にもお国ぶりがある。シャワーは汚れを落とすには合理的だが、やっぱりわれわれは湯にドップリと浸かって、疲れを癒したい。「湯に浸かることと、味噌汁の出汁には癒し効果がある」と言ったのは道眠先生だったが、「まさしく」と痛切に思う。

そういえば、道眠が千之助にこんなことを言ったことがあった。

「『風呂に入りたい、風呂に入りたい』と言うから日本人は清潔好きだと思ったが、日本人は誰一人手を洗わない」と、アメリカの医者に言われたときは驚いた、と。

たしかに、あまり風呂に入らないからアメリカ人は不潔だと思っていたが、彼らはわれわれより手を洗っている。そのとき、日本を出てみると、何が正しいのか、判らなくなるナと千之助は苦笑いするのであった。

シャワーが終わって一息入れていたとき、道眠ら医師たちが「皆に集まるよう」と言っていると、栄之助が伝えに来た。

行ってみると、サンフランシスコの木村から手紙が来ていて、乗組員が病気になったため、病院に残して出航するという。とはいっても、手紙の日付は 5 月初め、今は 6 月末である。太平洋を航行する予定の咸臨丸は順調であれば日本に着いているかもしれない。

宮崎立元が言った。「咸臨丸にも医師はいる。それでも置き去りにしなければならんということは、性質の悪い流行病に罹ったのだろう。わが乗組員も注意しなければならん。じゃから、手分けして皆の身体の状態を診ることにする。」

「先ずは、どこか変わったところがある者はいないか」と道眠が続ける。

皆は「これといって、ない」と返答する。

三名の医師は「ならば、結構」と言いながら、なおも団員一人ひとりに身体の具合を問診した。

翌日の 6 月 30 日、帰国の途に着くために、使節団はナイアガラ号に乗船した。ニューヨークから大西洋を渡ってアフリカ・ロアンダへ、喜望峰を通ってインド洋へ、ジャカルタ・バタビアを通って香港へ、そこから日本を目指すのである。おそらく江戸へ着くのは 11 月

初めごろであろう。

村垣が船出の歌を詠んだ。
　あみりかの　浦山遠く　かえり見て　御国にむかう　船出　嬉しき

だんだん遠くなるニューヨークの市街を皆は惜しむ目をもって眺めていた。
たが、道眠だけは舳先の前に行って、大西洋の東方を見ていた。この大海の彼方にヨーロッパ大陸があるという。機会があれば、今度はヨーロッパを訪れてみたい。と、道眠は呟いた。
船室に道眠が戻ろうとするとき、アメリカの水夫が『ニューヨークタイムズ』を見せてくれた。
「裳裾の長い、ゆったりとして衣服をまとい、顔は日焼けし、熱い魂、きらめく瞳をそなえた」。そう書いてあると言う。そしてブロードウェイを行進している写真が載っていた。
そこへ皆が集まって来た。皆も写真を見ながら、ニューヨークで受けた数々の接待や招待、そして何よりアメリカ人の親切さを思い出した。
「デュポン大佐、リー大佐、ポーター大尉にはすっかり世話になったが、再び会う日はあるであろうか」と言う者もいた。

【ニューヨーク市・
The New York Times 社】

そろそろ日本から持って来た食料が底をつき始めた。味噌･醤油はニューヨーク港を発つとき積込むはずであったが、**マッキーン**艦長が「こういう臭いものを積んでおくとみんな病気になる」と言って、海中投棄を命じた。
それを聞いて、「まいったなあ」と嘆く日本人。
それでも何人かは密かに隠して持込み、アメリカ料理に醤油をかけて食べていた。「こういうのを隠し味という」と言いながら。
しかし、そうこうしているうちに「隠し味」もなくなり、いよいよ肉食だけになってきた。それでも長い旅路では何とか肉類が食えるようになったことも事実である。
でも、アメリカ式の米飯だは馴染めなかった。アメリカのシェフと話したことのある恒蔵は、「飯の炊き方について、知ろうともしない、聞こうともとないシェフと、煮ることと、炊くことと、茹でることは違うと説明すると、興味を示すシェフもいた」と言っていた。アメリカの料理は〝焼く〟ことが主であったが、それでも〝煮る〟こともあった。しかし、飯や麺がないから、〝炊く〟ことや〝茹でる〟ことを知らない。同じ水の料理でも、煮ることと、炊くこと、茹でることはかなり違うのである。
千之助も海外に出て、初めてそんなことを痛感した。
味噌･醤油の臭いから逃げるアメリカ人、バターや肉の臭いに閉口する日本人、血が滴り落ちるような肉を旨いというアメリカ人、新鮮な魚を食べたがる日本人、〝対極〟的なそ

の食べ物の奥には、その国の人々の何千年もの営みがうかがえる、などと思ったりした。
　そんなころだった。アフリカのロアンダに停泊したとき、離日以来初めて鯛に遭遇し、刺身と焼いたものを食べた。喉の渇きが潤ったように嬉しく、涙が出そうだった。
　その夜は、みな味噌汁と香の物で米飯を食う夢を見ていた。

　さて、帰国後の小出千之助であるが、その後佐賀藩がパリ万博に参加したとき、使節として渡欧した。佐賀藩随一の西洋通であったが、1868 年に母危篤の報に馬で駆けつける途中、落馬事故によって 37 歳の若さで死去した

【麻布賢崇寺・川崎道眠の墓】

　川崎道眠はといえば、帰国後の 1862 年の**竹内下野守**(1807～67)一行の遣欧使節団にもまた加わった。そして、欧米においても同じように新聞の公益性を痛感した彼は、明治 5 年佐賀城下柳町にて「佐賀県新聞」を発行した。日本最初の新聞は明治 3 年の「横浜毎日新聞」であるから、それよりわずか 2 年後であった。それだけに時期早尚に悪戦苦闘したことはいうまでもないが、彼の下から自分の目で見たもの、耳で聞いたことを書く多くの新聞記者が育っていった。

さらに後日談であるが、日本使節団を歓迎したブロードウェイの華麗な行列を見ていた見物人の中に、ウォルト・ホイットマン(1819～92)なる詩人がいたとは一行は知る由もなかったし、ましてやホイットマンが「Broadway Pagent — Reception Japanese Embassy, 」(June 16, 1860)と題した詩を発表しようとは夢にも思わなかった。

西の海を越えて遥か日本から渡来した、
頬が日焼けし、刀を二本手挟んだ礼儀正しい使節たち
無蓋の馬車に身をゆだね、無帽のまま、動ずることなく、
きょうマンハッタンの街頭をゆく。

壮麗な顔だちのマンハッタンよ、
わが友アメリカよ、わたしたちのもとへ、
それではようやく東洋のご到来だ。

今日こそわれらが「対極」のご到来だ。
「創始の女神」のご到来だ。

（ウォルト・ホイットマン）

【完】

参考 : 尾佐竹猛『幕末遣外使節物語』(講談社学術文庫)、宮永孝『万延元年の遣米使節団』(講談社学術文庫)、司馬遼太郎「肥前の妖怪」(文春文庫)、司馬遼太郎『アームストロング砲』(講談社文庫)、マーティン･スコセッシ監督「ギャング・オブ・ニューヨーク」(映画 2002 年)、道元『典座教訓』(講談社学術文庫)